

長年の執念で 咸臨丸の 図面を入手

小川一男さん

(聞き手・山田迪生本誌編集委員)

小川一男さん (70)

歴史に埋もれていた 咸臨丸の構造

山田 小川さんは2005年6月に東京大学で行なわれた日本海事史学会(会長・安達裕之東大教授)のセミナーにおいて、咸臨丸の図面をほぼ完全な形で入手し保存されていることを発表なさいました。これにより、それまで不明な点が多かった咸臨丸がどういった船だったのかを正確に知ることができるようになりました。そもそも小川さんが咸臨丸の図面を入手しようと思ったきっかけは何だったのでしょうか。

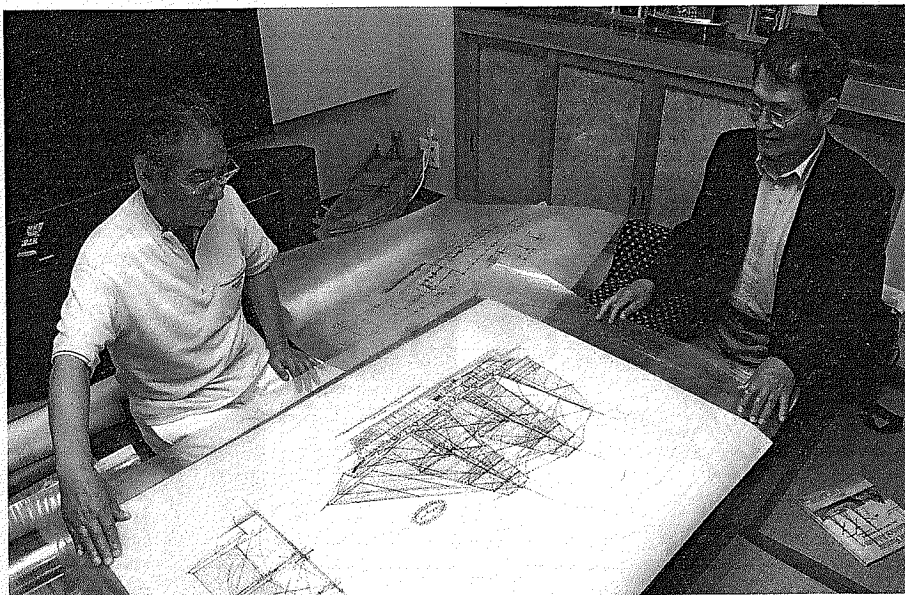
小川 咸臨丸が太平洋を横断して今年150年の節目ですが、50年前に横断100年を記念する行事が出帆の地である浦賀(神奈川県横須賀市)で行なわれたのです。昭和35年のことと記憶します。外務大臣だった藤山愛一郎さんなどが出席して記念碑の除幕などを行なったのですが、当時咸臨丸という船がどういった船であるかということ詳しくは誰も知らなかったんです。誰も説明できない。これじゃいかんかと、地元浦賀で育った私は思ったわけです。それから神戸の船長協会を訪ねて咸臨丸のことを聞いたんです。そこで親切に、帆船でありエンジンが付いていた船であることなどを教えてもらったのが、い

わば最初の「調査」でした。江田島の海上自衛隊や長崎方面にも問い合わせをしましたがそれ以上の手掛かりはつかめませんでした。そんな中、友達が咸臨丸のことが載っている新聞記事を見せてくれたんです。それは、咸臨丸の船体の概要を船舶研究家が明らかにしたという内容でした。

山田 飯盛汪太郎さんですか。

小川 そうです。それで私は日本中の電話帳を調べたりして飯盛さんを訪ねていろいろ教えてもらおうと思ったんです。飯盛さんは涙を流して喜んでくれましたね。ところがお会いして間もなく亡くなつてしまったんです。

山田 私もお会いしたことがありますが、いい方でしたね。飯盛さんが用いた資料というのは、1960年代に片山積さんという方が在日オランダ大使館を通して入手された図面だと思えます。その図面は、1969年1月に海事史学会例会で片山さんによって発表されています。あの図面は今どこにあるのか……。その図面から軍艦研究家の福井静夫さんが排水量を6000〜6500トンと推定しました。その後青山学院大教授の片桐一男先生が長崎奉行所の史料から咸臨丸のトン数が「6255トン」であることを発見し、排水量と「625」が一致しました。片桐先生は咸臨丸の帆走装置の図



図面を見る小川さん（左）と山田編集委員

も新潟県で発見しました。ただこの時点では咸臨丸の主要目を書かれた図面は誰も発見していませんでした。小川さんの入手された図面(同型艦バリ)によってこの不明な部分が明らかにになり、咸臨丸が完全な形で現代によみがえったのです。

小川 私はその辺のことは知らなかったんですよ。当時は海事史学会の存在も

知りませんでしたし、意欲だけはありませんでしたが一介の素人でしたから。飯盛さんが亡くなったことで私の調査はぶつりと止まってしまうたんです。

11枚の図面でよみがえった咸臨丸

山田 そこから進展はどのように?

小川 私は仕事の関係で米軍と接点が出て、その人脈を生かして図面の所在を調べてみようと思いましたが、いろいろな方にご尽力いただいた。開始して5年後に、ようやくオランダで手にすることができました。1989年のことです。

山田 結果的に図面はどこにあったのでしょうか。

小川 オランダ・ロッテルダムの海事博物館や、咸臨丸のスクリーンやエンジンを製造した各メ

ーカーなどに保管されていたのです。メーカーはドイツが多かったですね。その後アムステルダムの海事博物館に照会して入手した2枚を加えて、私が入手した図面は計11枚です。最初の9枚をオランダから持ち帰るとき、機内では手から離さなかつたですね(笑)。「とうとうやった!」と。

山田 小川さんはそれらをすべて自費で自分の時間を割いて敢行されました。小川さんの長年の個人的な尽力がこれだけの成果を生んだことを、私はもつと特筆して称賛していくべきと思います。

89年の図面入手から2005年の公表まで時間がありますが、この間はどういうに?

小川 図面を見て自分の想像のなかで復元させたり、入手した喜びを手元で味わっていた期間というんでしょうか。仕事で忙しくこの先をどうするかを考える余裕がなかった時期でもありました。しばらくして海事史学会という船の歴史を研究している団体があるということを知って電話してみたんです。そうしたら一度遊びに来いというので行ったら温かく歓迎してくれましたね。咸臨丸という船を知っていますかと言ったら、当然みんな知っている。実はその図面を持っていると話したらびっくりされましたね、「本物か!」と(笑)。だ

ったら見せましようということになって、2005年のセミナーでの発表という流れになったんです。そして、この専門の方々の手に委ねていろいろ役立ててもらったのがよろしかろうと、海事史学会に寄贈することにしました。いま私の手元にあるものはその複製です。

次の夢は復元!

山田 小川さんの図面を用いた成果物としては、船の科学館が2007年に発行した『船の科学館資料ガイド7 咸臨丸』があります。このなかでは咸臨丸の構造がその歴史とともに詳しく解説されており(編集部注)本特集の「船の科学館提供」の資料は同書からの転載)。執筆した元綱数道さんはこの特集でも小川さんのものをはじめこれまで発見された資料を用いた咸臨丸の構造解説記事を執筆することになっていきます(16ページ)。

さて、大願を成就され、咸臨丸の構造を机上で明らかにされた小川さんの今の夢は何でしょうか。

小川 咸臨丸の復元ですね。実はその話が横須賀で持ち上がっているんですよ。うれしいですね。私としてはそれを練習船にして若い人に乗船してもらい、浦賀から世界に向けて出帆してほしい。今はこの夢を見ている。